

茨城大学学報

第331号

平成29年2月～平成29年3月



雪の水戸キャンパス

INDEX

- ◆ 茨城県立医療大・東京医科大・茨城大農学部 三大学交流事業「三大学交流セミナー」
- ◆ 全国で活動するシティマネージャー等招き地方創生セミナーを開催
- ◆ 駐日コロンビア大使を招きグローバル化推進特別講演会
- ◆ 教育学部で「情報文化祭」1～4年生が揃う最後の情文祭
- ◆ ダイバーシティ推進室ロゴマーク 学生のデザイン案を採用
- ◆ 教職大学院設立1年の学びを振り返るイベント
- ◆ 霞ヶ浦流域に関わる研究者によるシンポジウム
- ◆ 基盤教育の本格展開に向けた教育改革FD
- ◆ 教職大学院と茨城県教育研修センターが連携協定を締結
- ◆ 幼児期における不器用さを考えるシンポジウム
- ◆ 平成28年度卒業式

◆ 茨城県立医療大・東京医科大・茨城大農学部

三大学交流事業「三大学交流セミナー」

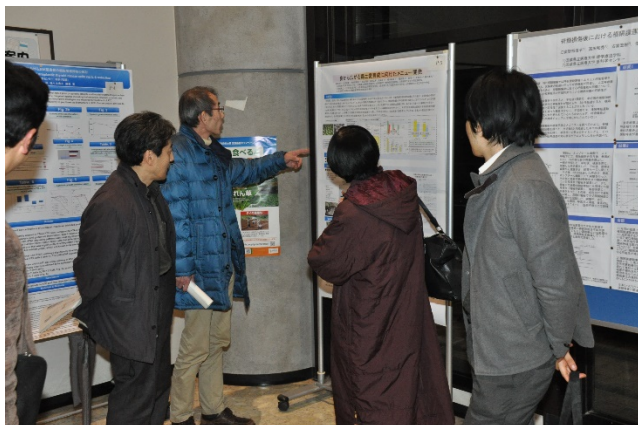
2月1日(水)、東京医科大学茨城医療センター・茨城県立医療大学・茨城大学農学部の主催による三大学交流セミナーが阿見キャンパスのこぶし会館で行われ、各大学の教員・学生などが集まり、講演やポスター発表をとおして交流しました。このセミナーは阿見町に近接する大学間の交流活動として定期的に行われており、第9回となる今回は茨城大学が幹事校を務め、健康と食について多様な視点から議論が展開されました。

招待講演では、秋田大学教授で本学OBでもある伊藤 英晃氏が納豆に含まれる抗菌ペプチドについて解説。さらに秋田における発酵食品をととした地域活性化の取り組みも紹介されました。

その後の各大学の教員による講演もそれぞれの切り口から心身の健康と食に関する最新のトピックをわかりやすく紹介する内容で、その後の交流会・ポスター展示とあわせて活発な交流につながりました。



参加者による講演



ポスター展示

◆ 全国で活動するシティマネージャー等招き地方創生セミナーを開催

生の事業に関わっている講師を招き、「茨城大学地方創生セミナー」を開催。75人が参加しました。講師を務めたのは、環境省出身で北海道ニセコ町参事の金井信宏氏や、桜川市・つくばみらい市で参与を務める博報堂ブランドデザイン副代表の深谷信介氏など、内閣府の地方創生人材支援制度によって北海道、新潟、奈良、茨城といった各地で活躍している5人のほか、有限会社モーハウス代表で本学社会連携センター特命教授の光畑由佳氏を加えた計6人です。セミナーは二部構成で、第一部では各講師が講演形式で取り組みを紹介し、その後の第二部では、住民主体、地域ブランディング、豊かな暮らし指標、ダイバーシティといった講師ごとのテーマに分かれ、少人数でのセッションを行いました。具体的な事例をもとに学びを深める機会となり、参加者からは「自分たちの地域でもすぐに実践できる発想を得られた」「いろんな地域で活動する人たちと交流できた」といった感想が聞かれました。



テーマ別セッションの様子



光畑由佳氏による講演

◆ 駐日コロンビア大使を招きグローバル化推進特別講演会

2月17日（金）、駐日コロンビア大使のガブリエル・ドゥケ氏を招き、グローバル化推進特別講演会「今日（こんにち）のコロンビア」を開催しました。

ドゥケ氏は、コロンビア国内やスペインの大学で教鞭をとったのち、コロンビア商工観光省貿易副大臣、世界貿易機関（WTO）コロンビア代表部常駐代表大使などの要職を経て、昨年（2016年）9月から駐日コロンビア共和国特命全権大使を務めています。講演は英語で行われ、生物多様性が豊かで緑あふれるコロンビアの自然・文化・観光・経済のほか、昨年のノーベル平和賞受賞でも話題になった同国の平和構築のプロセスなどについて紹介し、会場いっぱいの来場者も興味深そうに聞いていました。

また、講演後には、外務省の対日理解促進プログラム「KAKEHASHI プロジェクト」で昨年渡米した学生たちの主催による「International Cafe in Ibaraki Univ.」に、特別ゲストとして参加しました。ドゥケ氏が「コロンビアではパーティーの場ではみんなラテンダンスを踊るんだ。みんながカラオケに行くようにね」というと、学生から「踊りを見たいです」というリクエストがあったが、それに対して「誰かここで一緒に踊ってくれるならね」とおどけてみせるなど、終始和やかな雰囲気で行いました。学生たちも英語で団らんし、有意義な時間を過ごしました。

あわせて大使一行は、三村信男学長も訪問しました。三村学長から本学についての説明を受けたドゥケ氏は、「茨城には研究施設も多くあって魅力的。コロンビアは経済も安定しており、これからさらに発展していく国。今後本学、茨城県とも結びつきを強めたい」と語りました。



講演の様子



インターナショナルカフェで学生らと談笑するドゥケ氏

◆ 教育学部で「情報文化祭」1～4年生が揃う最後の情文祭

2月18日(土)、教育学部情報文化課程による「情報文化祭」が開催されました。同課程は平成29年度から学生の募集を停止するため、1～4年生が揃う情報文化祭は今回が最後。通常の作品の展示やパフォーマンスのほか、歴代の卒業論文を参照できるコーナーを設置するなど、課程の軌跡を振り返る取り組みも見られました。



◆ ダイバーシティ推進室ロゴマーク 学生のデザイン案を採用

昨年4月に新設したダイバーシティ推進室のロゴタイプ・ロゴマークのデザイン案を学内で公募し、応募総数117点の中から教育学部2年生の田邊悠果さんの案を選出しました。2月20日(月)には表彰式が行われ、最優秀賞の田邊さんに加えて、最終候補に残った案をデザインした学生3人に優秀賞が授与されました。



制定されたロゴマーク

本学のダイバーシティ推進室は昨年4月に新設され、平成28年度科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」により、女性研究者が働く環境の整備や積極採用に向けた取り組みを行っています。ロゴタイプ・ロゴマークの公募は、これらの取り組みに対する学内での理解と参加を広げることを目的に企画しました。教育学部美術選修などの協力により優れたデザイン案が多く寄せられ、学内での選考会において最終候補4点を選んだあと、今年1月に実施した同事業のキックオフイベントに際して行った参加者の投票により田邊さんの案が選ばれました。

田邊さんがデザインしたロゴは、男女が重なり合っている様子を、円を使ってシンプルに表したものです。男らしい、女らしい色をあえて使わないことで、固定観念を乗り越えるという意図も表現しました。

表彰式において尾崎 久記 ダイバーシティ推進委員会委員長(理事・副学長)は、「この事業に大きなインパクトを与えてくれるロゴタイプ、ロゴマークになった。みなさんには、制作者としてだけでなく、ダイバーシティを推進するメンバーとしても今後も関わってもらえたら嬉しい」と語りました。



表彰式出席者での記念写真 前列中央がデザインした田邊さん

◆ 教職大学院設立1年の学びを振り返るイベント

3月4日（土）、教職大学院（大学院教育学研究科教育実践高度化専攻）の主催による「第1回 教育実践フォーラム 教職大学院の1年間の学びを振り返る—理論と実践の往還を目指して—」が開催され、学生が1年間の活動や研究状況を報告しました。学生、教職員のほか、県内の教育関係者など100人が参加しました。

本学の教職大学院は昨年4月に開設され、現在、第一期生として現職派遣の学生9人と学部卒業後に進学した学生10人の計19人が学んでいます。冒頭で挨拶をした生越 達 教育学研究科長は、「1年目ということで、学生、教員はもちろん、実習校や現職派遣の本務校も含めて、みんなで試行錯誤しながらつくってきた。学生にとっては苦労も多かったと思うが、茨城の教育を良くしようという覚悟もできてきたのではないか」と語り、実践発表を控えた大学院生たちを労いました。

全体会では、常陸太田市立水府小学校を本務校とする現職派遣の興野 聖人さんと、学部卒学生の菊池 文太さん、萩原 将さんが、「教職大学院1年間で学んだこと」と題した実践発表を行いました。いずれの発表においても、実習やディスカッションを通して研究課題が変容していったことに言及しました。菊池さんは「指導技術の引き出しを増やすことから、子どもの学びを主体とした教育へと、実践の課題が変わった」と振り返りました。また興野さんは、地域資源の活用をとおしたカリキュラム・マネジメントの実践を2年目の課題として掲げました。

後半の分科会では、学校運営、教育方法開発、児童生徒支援というコースごとに分け、全員が口頭発表を行いました。フロアからも研究・実践内容に関する意見が多く出され、それぞれの学生が2年目へ向けた課題を確認するとともに、地域の教育における教職大学院の意義を発信する機会となりました。



全体会の様子

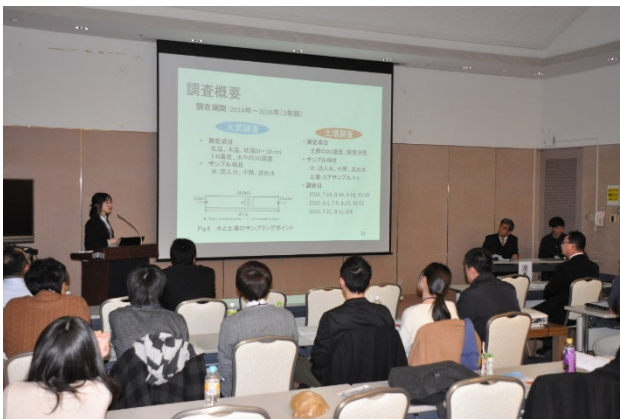
◆ 霞ヶ浦流域に関わる研究者によるシンポジウム

広域水圏環境科学教育研究センターは、3月5日（日）、公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究 2017」を茨城県潮来市のかんぼの宿潮来にて開催し、霞ヶ浦流域をフィールドとする研究者や、水圏・環境分野に関心のある一般市民や高校生、行政関係者など112人が来場しました。

潮来市にある同センターは、生物学・地質学・分析化学等を専門とする教員が所属しており、広く水環境に関わる教育・研究活動を展開している。公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究」は2014年から毎年開催しているものです。

シンポジウムは、大学生や高校生による研究発表を中心に、口頭発表15件とポスターセッション15件で構成され、水質や放射性物質の測定、外来魚や絶滅危惧種の生態、漁業、生態系、あるいは流域の歴史や地形・地質に関する研究といった幅広いテーマが扱われました。ポスターセッションも例年以上の盛り上がりを見せ、それぞれの交流が図られました。

また、今年のシンポジウムには、初めて原 浩道 潮来市長も駆けつけました。原市長は、「自分が小さい頃は沼や湖も水底が見えるぐらい透明で、いろんな生き物に出会えた。2018年には世界湖沼会議が茨城県内で開かれるが、研究しているみなさんの知見もよりよい政治に活かし、霞ヶ浦・北浦の水をきれいにしていきたい」と述べ、その後は学生らの発表に熱心に耳を傾けていました。



口頭発表の様子



ポスターディスカッション
(中央が原・潮来市長)

◆ 基盤教育の本格展開に向けた教育改革 FD

3月7日（火）、「基盤教育 始まる前のはじめの一步」と題した教育改革 FD を水戸地区、日立地区及び阿見地区の3地区をVCSで結んで開催し、教職員85名が参加しました。従来の教養教育に代わる全学的な基盤教育が4月より始まるのを前に、具体的な授業実践・改善の事例やパネルディスカッションをとおして、基盤教育や授業づくりへの理解を促すことがねらいで、本学の教育改革FDとしては3回目となります。

冒頭、開会の挨拶に立った栗原和美大学教育センター長は、教養教育の企画及び運営等を担ってきた大学教育センターが今年度限りでその役目を終えることに触れ、21年間の実績等の紹介とこれまで関わってきた教職員への謝意が述べられました。

二部構成の第一部では、大学教育センター推奨授業として表彰された授業の実践について、人文学部の後藤玲子教授（現代経済入門）と鈴木栄幸教授（情報リテラシー）が、工夫しているポイントなどについて報告しました。いずれの実践報告においても、学生が知識や技能を自らの知的ニーズや生活に引き寄せられるような工夫が施されていること、学生の授業評価などをもとに継続的に授業改善を図っていることが示された。これらの報告は、参加者への事後アンケートでも「参考になった」「学生の主体的な授業参加を促すための手法が理解できた」などと前向きな感想が多く得られました。

続く第二部では、基盤教育を担う全学教育機構の木村 競 機構長が司会となり、大学教育センターにおいて教養教育の企画・運営等を担当した企画実施部長経験者3名と、前述の推奨授業表彰者2名によるパネルディスカッションが行われました。ここでは、教養教育と基盤教育の違いや体制の移行による教職員の不安、アクティブ・ラーニングにおける悩み、基盤教育における多様性の確保など、基盤教育を行う上での具体的かつ本質的な課題が各パネラーから示されました。

最後に挨拶した太田 寛行理事・副学長（教育統括）は、「専門科目の前段階としての教養教育から、ディプロマ・ポリシーに基づく基盤教育へという、大学の歴史上大きな変革は、ここに集まる全ての教員が参加して初めて果たしうるものだ。今回のような議論を続けながら、授業やカリキュラムの継続的な改善に努めていきたい」と述べました。



推奨授業実践報告（人文学部・鈴木栄幸教授）



パネルディスカッション

◆ 教職大学院と茨城県教育研修センターが連携協定を締結

大学院教育学研究科と茨城県教育研修センターは、3月10日（金）、連携協力に関する協定を締結しました。今後、相互の機能や人材を活かし、地域の教員養成・研修の充実を図ります。

本学内で行われた協定の締結式では、茨城大学大学院教育学研究科の生越 達 研究科長と、茨城県教育研修センターの安藤 昌俊 所長が協定書に調印を交わしました。その後の挨拶で生越研究科長は、「大学院や学部の改革を進める中で、教員としての質や実践力を高めるためにどうすれば良いか考えてきたので、今回の連携は嬉しい。茨城の教育についてざっくばらんに議論するきっかけにできれば」と語りました。また、安藤センター所長は、「茨城大学の教職大学院による理論に基づいた高度な実践と、研修センターのノウハウを融合して、すばらしい教員を育てていきたい」と述べました。

今後は、同センターの新任教務主任研修講座等の講座の運営への教職大学院生の参加、教職大学院の授業への同センター指導主事の参加などの取り組みを進めていく予定です。



調印式にて（中央左が安藤センター所長、右が生越研究科長）

◆ 幼児期における不器用さを考えるシンポジウム

3月13日（月）、「幼児期における不器用さの支援を考えるー幼少連携に向けてー」と題したシンポジウムを開催しました。

子どもの不器用さや身体活動のぎこちなさは、近年、発達性協調運動症（発達性協調運動障害：DCD）として着目されているものの、幼児教育や初等教育の問題としての国内での認識は低い状況です。これらの不器用さは、子どもの自尊心や学習のモチベーションにも大きく関わることから、適切な教育カリキュラムの検討が求められています。

こうした現状のもと、茨城大学教育学部では、国内の他大学の教育学部ではあまり見られない脳波や脳血流、心拍計測、視線計測や運筆計測といったさまざまな行動・生体機能計測機器を配備していることから、脳科学の研究者と教育の実践に関わる研究者等とが協働し、エビデンスに基づいた教育カリキュラムの開発研究を進めています（茨城大学推進研究プロジェクト「神経教育学的アプローチに基づくカリキュラム開発」）。今回のシンポジウムは、それらの研究の視野と知見を紹介するものとして企画されたものです。

シンポジウムにおいて、弘前大学の増田 貴人 准教授は、DCDの基本的な概念や適切な支援を説明しました。また、国際医療福祉大学の平野 大輔 講師は、作業療法の観点から子どもたちの不器用さに迫った。そして茨城大学教育学部の渡邊 将司 准教授、齋木 久美 教授、勝二 博亮 教授は、運動や書字といったそれぞれの切り口から、子どもたちを観察した様子や具体的な介入・支援の事例について報告しました。

シンポジウムには、県内の幼児教育・保育の関係者など129人が参加しました。同分野への関心の高さが窺えました。



弘前大・増田准教授による話題提供



シンポジウムを企画した茨城大・勝二教授

◆ 平成 28 年度卒業式

3月23日（木）茨城県武道館において、学長、役員はじめ来賓等の参列のもと、平成28年度茨城大学卒業式が挙行され、2,040名の卒業生が巣立ちました。式は、本学管弦楽団の前奏に始まり、三村学長から学部、大学院および専攻科の卒業生、修了生の学部等総代に学位記、修了証書が手渡されたのち、告辞が贈られました。

これに対し、卒業生総代の工学部 須崎侑生さんから答辞があり、最後は参列者全員による校歌斉唱で閉式となりました。



◆ 平成 28 年度卒業式学長告辞

茨城大学長 三村 信男

卒業生、修了生の皆さん、卒業と修了おめでとうございます。学業を成し遂げ、この日を迎えられたことを、心からお祝いたします。

本日、学士課程 1,552 名、大学院修士課程と博士前期課程 449 名、大学院博士後期課程 17 名、専攻科 22 名、合計 2,040 名の皆さんに、学位記と修了証を授与致しました。この中には、61 名の留学生が含まれています。これだけ多くの皆さんを社会に送り出すのは、茨城大学にとって大きな喜びであり、また、誇りとするところであります。

今日に至るまでには、それぞれ勉学や研究において大きな努力をされてきたに違いありません。本日の学位記あるいは修了証の授与はその成果を認めたものであり、皆さんは、心から誇らしく思い、また、深い達成感に浸っていることと思います。

同時に、この日に至るまでに、皆さんが沢山の方々に支えられてきたことも忘れることはできません。指導教員をはじめ、多くの教職員や友人・先輩が皆さんの勉学を支援してきました。また、ご家族の皆様も、陰になり日向になり皆さんを支えてこられました。ご家族と関係者の皆様のお喜びもさぞかしと拝察し、心からお祝いを申し上げます。

さて、皆さんは茨城大学での学園生活をどのように振り返っているでしょうか。

私は、最近、本学の学生が元気になり、社会から注目されることが大変多くなったと感じています。それは、学生の皆さんが、地域や海外に出て、様々な活動を行い、活躍しているためです。例えば、常総水害からの復興に向けた小中学校での防災教育ボランティアや、あるいは、新しくできた道の駅での取組、ベトナムでのジャパン・フェア参加など多くの事例があります。また、学問的な成果の面でも、学会での優秀発表賞などを受賞し、今年、学生表彰を授与したものが46件ののぼります。さらに、昨年、もっとも多く報道されたのは、陸上競技部が10年ぶりに箱根駅伝予選会に出場したことでした。他にも、関東甲信越大学体育大会でラグビー部が19年ぶりに優勝、さらに、オリエンテーリング部の女子選手が台湾で開かれたアジア選手権で優勝といった活躍が続いています。まさに、あらゆる分野で、学生の活躍が目立っています。



こうした活躍は、決して偶然ではなく、現在進めている教育改革に結びついています。皆さんが在学した過去数年間、本学では、教室での一方向の講義中心の教育から、アクティブラーニングや実践的な課題研究などによる能動的学修へと転換を図ってきました。

その目標として、皆さんが在学中の平成27年に、ディプロマ・ポリシーを策定しました。ディプロマ・ポリシーとは、卒業までに到達すべき教育目標のことであり、茨城大学で身につけるべき5つの能力を定めたものです。その5つの能力とは、第一が世界の俯瞰的理解、つまり、自分の中に世界の見取り図を作ることです、第二が専門分野の学力とスキル、第三は課題解決力・コミュニケーション力、第四は社会に貢献しようという姿勢、そして、第五が地域活性化に向けた志向です。



このディプロマ・ポリシーは、総合的な人間力を養うという本学の宣言です。私は、皆さんが、卒業までの4年間、あるいは、大学院での2年、博士課程での3年間に、こうした多面的な能力を身につけたものと確信しています。そして、その証として、最初に述べたような様々な活躍が生まれてきたのだと思います。皆さんには、この事に自信をもって、社会にこぎ出して欲しいと思います。

次に、皆さんの今後の活躍に向けて、私の期待を述べたいと思います。それは、「社会の変化に対応できるリーダー」をめざして欲しいということです。21世紀という時代の特徴は、社会の変化の速さにあります。ですから、この変化に柔軟で的確に対応できるリーダーこそが必要とされているのです。

現在の世界は、地球環境問題やテロ、紛争など困難な課題とともに、科学技術もさまざまな勢いで進んでいます。人工知能や自動運転のように、実現にはまだ10年も20年もかかると言われていたことが、既に現実になっています。数年もすれば、車はハンドルから手を離して運転し、人工知能が病気の診断を行うなど、世界の姿は一変しているかも知れません。私達は、今、極めて大きな時代の転換点に立っていると実感しています。



私は、このように変化が激しく、先の見通せない時代を生き抜く上で、2つのことが大切だと考えています。

その第一は、一人一人が、これこそ自分の軸だというものを持つことです。周りが変化するからこそ自分のよって立つものをしっかり持っていることは非常に重要です。自分の基盤となる知識やスキル、ものの見方が必要であり、皆さんが本学で学んだことは、この自分の軸を作っていくことだったのです。

もう一つは、同時に広い視野を持つことです。変化する社会の動きを把握して、自らがその中のどこにいるのかを見通す力です。激しい変化に対応するには、そうした広い視野が必要です。また、どんな場面であれ、自分の専門だけで解決できる問題はありません。問題の全体像を捉え、他の人と協力して初めて解決できるのであり、そのためには、自らの枠を超えて他の分野を理解し、協力することが必要です。



この2つを備えた人は、T型人才と呼ばれます。英語のアルファベットのTですが、横棒は広い視野を表し、縦棒は自分の軸となる専門知識を示します。これからの職業生活と人生の中で、横棒を大きく広げ、縦棒を太く深くして欲しいと思います。

皆さんには、茨城大学で培った総合的人間力を土台にして、生涯学び続ける姿勢を大事にし、社会の中で一層成長して欲しいと思います。どのような場所で働き、生活するとしても、時代に流されない指針を持ちつつも、その時々の変化に柔軟で的確に対応できるリーダーとして成長し、よりよい社会の実現に向けて活躍して欲しいと願っています。

最後に、茨城大学は、2年後の2019年に創立70周年を迎えます。その時には、卒業生・修了生の皆さんと共に盛大に祝うと共に、さらに創立100周年に向かって、より一層、持続的な社会の実現に向けて貢献できる大学へと成長していきたいと考えています。私達は、今後さらに大学改革を進め、卒業生の誇りとなる大学になるべく前進していきます。茨城大学は、皆さんの母校です。その名の通り、皆さんが、うれしい時、悩んでいる時、どんな時でも訪ねて頂けるように、常に門戸を開いて待っています。

皆さんの健康と今後の人生のご多幸を心から祈念して、私の告辞と致します。

